



オア舞う百合

ルルと美姫と宝石の魔女

小説 あらおし 悠
挿絵 はらいた

立ち読み版

第一章

砂漠の国のお姫様

006

第二章

波乱の逃避行

063

第三章

霊山の神殿

126

第四章

砂漠の姫と宝石の魔女

188

終章

オアシスに咲く秘密の愛

251

登場人物紹介

Characters



アーシャ

宝石から現れた魔女。
踊り子のようなセクシー
な立ち振る舞いをする。



ファイルーズ

宝石の交易で栄えたジャウ
ハラ王国のお姫様。おと
りして大らかな性格。



ルル

下働きをしていた娼館から脱
走し、砂漠をさまよう少女。
少々内気で身体も小柄。

「ばあやには黙っててあげるから、たまにはワガママ言わせて。おねがい」

「そう……ですか？　で、では……なにかあったら、すぐにお呼びくださいませ」

甘えた声に押しきられ、侍女たちは洪々、浴室から出て行つた。もっともルルは、その様子を目で確認することができなかった。なぜなら、浴槽の底で、お姫様に申し掛かられていたから。背中には裸のお尻が乗り、頭も片手で押さえ込まれる。

（ふがつ……ふぐ、んぐぐぐ……んぐう！）

いきなり沈められたせいで息が続かない。口を押さえた両手の指の間から、空気がどんどん漏れていく。砂漠で倒れた時以上に苦しい。気が遠くなりかける。もう窒息すると思つた寸前。急に身体の圧迫感がなくなった。

「ふ……はああああ!!」

浅いお湯から急浮上し、思いきり空気を吸う。十数回も深呼吸して、ようやく息も気持ちも落ち着いてきた。

「は……はっ、けほけほ……。び、びっくり……した……。死ぬかと、思つた……」

「びっくりしたのはこつちよ」

しかし背後からの怒つた声で、せっかく戻つた呼吸が乱れる。振り返ると、ファイルーズが唇を尖らせていた。お湯に濡れた長い金髪が、肌に絡みついている。両腕で押さえられ、深さが強調された乳房の谷間に、水滴が吸い込まれていく。その様に息を飲んだ。同性の裸なんて、娼館で飽きるほど見ていたはず。なのに、心臓が無闇にドキドキする。疲

れきった娼婦とは違う、彫刻よりも綺麗な肌が、ルルにいけないものを見た気にさせる。

「ひひひ、姫様……っ！ あ、あの……あの……」

「ダメじゃない！ ここは、わたし専用のお風呂なのよ？」

言われてルルは「あつ」と声を上げた。こんな豪勢なお風呂、宮殿の主人か、そうでなければ来客用に決まっている。ちよつと考えれば分かりそうなものに、浮かれて全然気がつかなかった。ただ、ファイルーズが怒っているのはそれだけじゃなかった。

「そうでなくても、男の子が侵入したなんて知れたら、ばあやに殺されてしまうわ」

そうだった。自分は男ということになっているのだった。だからなのか、彼女も懸命に身体をくねらせ胸を隠そうとしている。

白い肌がピンクに染まるのを見ていたら、なんだかルルまで緊張してきた。見てはいけないと思っても、なだらかな肩や、細い腕では隠しきれない乳房に、どうしても目が奪われる。一刻も早くこの場を立ち去ろうと思っているのに、身体が動いてくれない。

「ご……ごめんなさいっ！ すすっ、すぐ出て行きます……きゃあッ！」

「あぶないっ！」

意思に逆らう身体に鞭打ち強引に立ち上がったら、浴槽の底で足が滑った。仰向けにひっくり返ったルルを、ファイルーズが咄嗟に受け止める。

「あぷっ、ぷあっ、ふあ、ンふあ！」

「慌てないで。大丈夫だから」

溺れて暴れる身体を、彼女は優しく抱き締めてくれた。その裸身に必死になってしがみつきの、ようやく落ち着きを取り戻す。でも――。

「……………あら？」

彼女の目が、不思議そうに開いた。その手は、なんの拍子かルルの胸にべったり当てられている。その違和感を確かめるように、むにむにと揉み始めた。

「……………きッ、きやあああああッ!!」

悲鳴を上げながらお湯を掻き分け、広い浴槽の角で身をかがめた。両腕で必死に胸を隠す。お姫様のそれと違って、余裕で覆えてしまうのが悲しいけれど、そんなことを気にしている場合じゃない。水面に波紋を描きながら、金髪姫様がゆつくりと近づいてくる。わずかな希望さえ抱く間もなく、彼女は真実を言い当てた。

「あなた……………もしかして、女の子？」

ピクンと小さく肩が跳ねる。それが、彼女への答えになった。

（ばれた……………ばれちゃった……………）

もし、砂漠で行き倒れた女の子がいたなんて話が街に漏れたら。それが、追っ手の耳に入ったら。娼館に連れ戻される自分の姿が頭の中を駆け巡り、お湯に浸かっているとは思えないほど蒼白になって震え出す。砂漠を歩いていた時には、逃げ出したことをちよつと後悔したくせに、奇跡的に命拾いしたおかげで、捕まりたくない欲が出てきている。

「ちよつと、よくお顔を見せてくれる？」

彼女は両手でルルの頬をやんわりと挟み、興味深げにまじまじと瞳を覗き込んできた。「本当。よく見たら、綺麗な眼をしているわ。睫毛も長いし、頬だって、こんなに柔らかくて……唇も可愛い。どうして男の子のふりなんてしていたの？」

最初に誤解したのはそっちだろう。でも、こちらがその誤解を利用したのは事実。

（娼婦になるのが嫌で逃げた、なんて、お姫様には言えないよお……）

答えられずに黙るルルを、彼女は深く追求はしなかった。それどころか、女の子と分かって緊張感が解けたのか、ほっぺたを摘んだり引つ張ったり、にこにここと弄ぶ。

「なーんだ。女の子だったのね。それならそれと言ってくればよかったのに。よしつ、せっかくだから一緒にお風呂にしましょ。ほら、その濡れた服を脱いで脱いで」

「はあ。………はあ!? ちょ、ちよつと待つ……やああああん！」

戸惑うルルのシャツやズボンを、彼女は躊躇なく剥ぎ取った。実はやっぱり男だった、なんてことは一切疑っていない。バシャバシャとお湯を跳ね上げながら抵抗するも、下着まで奪われて完全に裸にされてしまった。

「うわあ……本当に女の子なのね。身体も手足もこんなに細いし……それに……んふ、ちゃんとおっぱいがある」

「やん! ひ、姫様っ。やめてください……」

ツンと乳房を突かれて、ルルは胸を隠して身体を振らせた。触られたことではなく、彼女とは比べ物にならない、自分の胸の貧弱さが恥ずかしくて。こうして並ぶと、その差は

歴然。場合によっては、このままでも男で通せたのではという気にさえなる。

「さあ、いつまでも固まってるんで。洗ってあげるわ」

洗い場に移動したファイルーズが手招きする。

「そんなっ、畏れ多いです！ 姫様がなさることではありません！」

「いいから来なさい。逆らうとお……大声で人を呼んじゃうわよお」

下層市民がお姫様に身体を洗ってもらうなんて前代未聞。洪ったら、明るく可愛く脅された。さすがに本気とも思えなかったけど、そう言われたらルルには逆らえない。

（ううっ……女の子ってばれただけなのに……）

本来なら、なんら後ろ暗いことじゃないのに、それが弱みになってしまった。観念し、壁際に設えられた水道の前にぺたりと座り込む。

「んふふー、よろしい」

なにが嬉しいのか、ファイルーズは弾んだ声でルルの頭を洗い始めた。お姫様とは思えない手際の手さで、髪の中の砂埃が綺麗に落とされていくのを感じる。頭がさっぱりしたところで、彼女は次に、たっぷり泡立てた石鹸を背中いっぱい塗り広げた。

「どう？ 気持ちいい？」

「は、はい……。ん、ん……。んくうっ！」

確かに気持ちいい。気持ちいいのだけど、ちよつと困っていた。こんな風に他の誰かに触られるのなんて初めてだから、肌が過敏に反応し、ピリピリと妙な痺れに襲われた。掌

が肩をなぞり、指先が背中を撫で上げるたび、変な声が喉の奥から漏れそうになる。

それにしても、彼女の手つきには躊躇を感じない。背中から、脇腹、そして前に手を伸ばし、お腹の辺りを念入りに擦る。お姫様とは思えない、痒い所に手が届く丁寧さ。

「あ……あのっ、姫様……ンッ。誰かを洗ったこととか、あるんですか……くんっ！」

「んー。侍女には毎日洗ってもらっているけど、してあげるのは初めてよ。慣れているつもりだけど、されるのとしてあげるのでは全然勝手が違うのね。加減が難しいわ」

このピリピリは、彼女の手加減のせいらしい。もっと強くしてくれてもいいくらいなのだけど、してもらっている分際で注文なんてつけられない。

「今度は、ここね」

「あ、んッ！」

お臍の窪みを薬指でくすぐられ、ルルは小さく悲鳴を上げた。自分で洗った時にはありえない不思議な痺れが、お腹の奥から脚の付け根の間を、一瞬、雷のように走り抜ける。

（な……なに、今の………?）

雷撃のように強烈なのに、どこか甘い。この感覚を、ルルは知っていた。

「華奢な身体……。こんなに細いのに、どうして男の子だなんて思い込んだのかしら」

ファイルーズが、おかしように笑う。それはきつと、自分があなたのように綺麗じゃないから。そう言いたかったけど、叱られそうな気がしたので黙っていた。

「ねえルル。あなた………どうして男の子のふりなんてしていたの？」

「……え？」

わずかな沈黙の後、さっきは引つ込められた質問が、逡巡しながら繰り返された。

「だって、わたしの離宮にいるなら、女の子のままにいる方が怪しまれないはずよ。それなのに、あえて男の子のように振る舞っていたのには、訳があるのでしょうか？」

「それは……」

「聞いてはいけないと思ったのだけれど……ごめんなさい。どうしても気になってしまつて。……あなたは、どこから来たの？」

好奇心と、氣遣いと。きつと訳ありと思つて詮索しないでくれていたのだろうけど、葛藤の末、ついに好奇心が勝つてしまったみたいだ。

正直に話せば、あるいは同情してくれるかもしれない。それでもやはり、彼女にルルの悩みが理解できるとは思えなかった。なにより、やはり居場所がばれて娼館に連れ戻されるのが、怖い。身勝手な理由に、どうしても口が重くなる。

「ごめんなさい……」

それだけを、やっとの思いで絞り出した。あれもこれも秘密で、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。彼女は、命の恩人なのに。

「いいえ、わたしの方こそ無神経だったわ。もう聞かないから安心して」

「で、でも……！ 怪しいとは思わないんですか？ もしかしたら、わたし、姫様を狙う悪い奴かもしれないですよ!？」

ありがたいけど、いくらなんでも物分かりがよすぎる。無警戒すぎる。非難の声で振り返ると、彼女は「そんなわけじゃないじゃない」と愉快そうにころころ笑った。

「もしルルが悪い人なら、もっと上手な言い訳をするでしょ？」

呆氣に取られた。どこの誰とも一切明かさなない怪しい者を、叩き出すどころか無条件で信じるお姫様がどこにいるだろう。自分の隠し事を棚に上げて呆れ、それ以上に、彼女の氣遣いに胸が締めつけられる。心の中で、何度も何度も謝罪する。

「さ、そんなことより続きをしましょ。今度はこつちを洗ってあげるわ」

暗くなりそうな雰囲気振り払おうと、ファイルーズが明るい声で話を打ち切った。再び手が動き始める。でもその行方に、ルルは激しく動揺した。

「あ、あの姫様……。そこは自分で……」

「遠慮しなくていいから。無用な詮索をしまったお詫びよ」

「そ、そういうことじゃなくて……きや……ああんっ」

細い指が、なだらかな胸を撫でる。捏ねるように、揉むように、石鹼の泡を纏わせて。先端の突起を掠めるたび、ピクピクと細かく身体が跳ねる。ほんの微弱な痺れなのに、背中や腰が強張る。自分の身体に起きていることが理解できず、怖くなって身じろぎする。

「あの、姫様……！ ほ……本当に、いいです……からっ！」

「だめっ、暴れないで。それから、姫様じゃなくてファイって呼んでって言ったでしょ」
まだルルが遠慮していると思ったのか、両手を回して抱きついてきた。まるで小山のよ

うな彼女のふたつの膨らみが、背中にぐぐつと押しつけられる。しかも、綿のように柔らかい中に硬い突起を感じ、鼓動が激しく跳ね上がった。

（うわ……うわああ……！）

お姫様の乳房と乳首に直に触れるなんて、なんと不敬極まりない大罪。もしこんなところを家臣の誰かに見つかったらと思うと、全身が委縮する。

それなのに、お腹が、脚の間が、熱い。変なうずうずが生まれて、どうすればいいのかわからず、腿の間に手を挟んで身を振る。それを、胸に触られ恥ずかしがっていると解釈したのか、ファイルーズはあからさまな動きで乳房を揉み始めた。

「ひ……姫様……。ちよ……困りま……す、うん！」

「姫様じゃなくて、ファイよ。さあ呼んで」

「だ、駄目です姫さ……みゃああッ！」

聞き分けのないルルの乳首が、キュツと摘み上げられた。鮮烈な痺れが身体を走り、仰け反った身体が彼女にもたれかかる。背中で大きな乳房が潰れ、肩甲骨辺りを硬い乳首に突かれる。彼女は、女の子同士の気安さで遊んでいるだけ。そうと分かっているけど、こんなに肌と肌が密着したら、冷静でなんていられない。反応を確かめるように、ファイルーズが肩越しに覗き込んできた。その横顔を、陶然となった瞳で見つめ返す。

（姫様、綺麗……）

湯気の中に仄かに浮かぶ白い肌と、濡れた金髪。背中に触れた胸から、鼓動が伝わる。



長い睫毛の瞳が、悪戯っぽく細められる。その妖しい輝きに、思考がぼやけてくる。そして、薄桃色の唇の動きに誘われるように、ルルは、彼女の名前を呼んだ。

「ふぁ……ファイ、様ぁ……」

自分でも驚くような、蕩けるように甘えた声。動いてくれない彼女に焦れて、自らファイルーズの手に胸を押しつけようとしたら、不意に彼女の身体が離れてしまう。

「はい、よくできました」

「ぶひゃあ!!」

どうしてと思うより早く、頭から大量のお湯をかぶせられた。不意打ちに変な悲鳴が口から飛び出す。彼女が手桶を高々と掲げていた。石鹸を流してくれたらしい。

「さ、綺麗になったわ。もう一度お湯に浸かったら、部屋に戻りましょう」

いつもの屈託のない表情で、ファイルーズが微笑む。でも、ルルの胸の奥には、自分でも正体の分からない黒いモヤモヤが、洗い流しきれずに残っていた。

股間に当てられた手が、ゆっくりと動き出した。指の先を、強弱をつけながらぐいぐい押しつけ、身体の奥まで振動を染み込ませてくる。

「ん……んむっ……。ふ、あ、あ……んくっ」

ルルは、唇を噛んで股間を襲う感覚に耐えた。両手でアーシャの腕を掴み、内腿を閉じて彼女の動きを阻止しようとする。でも脚に力が入らなくて、結局、指の動きが大胆になるのを許してしまう。許しを請おうと視線を上げて、ふと、彼女と目が合った。

「——!!」

アーシャが、嬉しそうに、笑っている。ルルはカッと顔を染めた。触られるのが嫌なら彼女を突き飛ばせばいい。なのに実際は、嫌がる素振りだけでされるがまま喘ぐだけ。身体が愛撫を受け入れている。まるで、その刺激を待ち望んでいたかのように。

「いや……いやっ……。んむっ!」

慌てて身体を反らそうとしたら、その前に唇が塞がれた。口を閉じるより早く舌がぬるりと入り込んで、ルルの舌尖に絡みついた。

「——!! あふ、ふ……ふあ……」

キスに不慣れな身には、それだけで瞬間的に頭が真っ白になるほどの快感だった。さらに食い込んでくる舌を、思わず受け入れそうになる。けれど、弾力のある唇が、蕩けるように柔らかかったファイルーズとは違うキスの感触が、辛うじて我に返らせた。力の入らない腕で、懸命にアーシャを押し返す。

「や、やめ……」

「そんなに、あのお姫様のことが好きなの？」

唇を擦り合わせながら囁かれ、ルルは固まった。あまりに直接的な尋ね方をされたことに。そして、彼女の表情に。憂いているような、憐れんでいるような瞳の色に。

「どれだけ惹かれているかは知らないけれど……もう、彼女には会えないわよ」

「……………あ」

ルルは、身体が重くなるのを感じた。まるで、胸に鉛を押し込まれたように。

そんなの、言われなくなつて分かつていた。お城から追われる身になった時点で、どうしてお姫様との再会が果たせるだろう。分かつていたはずなのに、考えなかった。考えられなかった。罪の意識が、ルルにそれ以外の事実を目隠ししていた。

「お……お詫びもできないって、こと？」

「それができた時には、命を捨てることになるでしょうね。私だって、むぎむぎあなたを酷い目に遭わせたくなかないわ。だから……諦めなさい」

身分違いの上に罪まで犯して、再びファイルーズの前に出られるはずがない。分かつていたはずなのに、改めてはつきり告げられると、動揺を抑えられない。

「そんな……。でも、あたし……あたし……っ」

それでもなお、諦めきれない気持ちに涙になつて零れ落ちる。アーシャはそれを舌で拭い、優しい手で髪を撫でた。

「悪いと思ってるわ。もう少し私の魔力が持てば、お城の連中は朝まで目覚めなかったのに。百年も封印されていたせいかしら、力が戻りきってなかったみたい。ごめんね」

だから——そう言いながら、彼女は再び唇を近づけた。

「あなたがお姫様を忘れられるように、私が代わりに慰めてあげる……」

「え？ あ……」

近づく吐息に戸惑い、迷い、逡巡している間に、ふたりの顔が重なった。今度はそれはねのけられない。さつきは拒んだ魔女のキスが、お姫様との別れを実感させる。

(フアイ様……)

自ら彼女への想いを裏切っている罪悪感に、我慢しきれない寂しさに押し潰されそうになって、ルルは自ら、魔女に唇を押しつけていた。

「ふふっ……いい娘……」

薄く開いた目蓋の隙間で、魔女が妖しく微笑んでいる。瞳の奥に燃える淫靡な炎に魅入られて、まるで身動きがとれない。きつく抱き寄せられ、舌先で唇をチロチロと舐められる。その動きに誘い出されるように、震えながら自らも舌を差し出した。ほんの少し、小指の先ほど。しかしアーシャはそれにばかりと食いつき、まるで罠にかかった獲物のように思いきり引きずり出した。そして唾液の纏わりつく舌を、扱くように貪り吸る。

「ふ、ぐ！ あぶ、ン……むううっ！」

いきなりの暴拳に口を閉じることができず、されるがまま蹂躪される。アーシャは顔を

斜めに傾け、根元近くまで舌を咥え込んだ。じゅるじゅると派手な音が洞窟内に響く。耳を塞ぎたくなるような卑猥さと、触れ合う舌のざらつきが、背筋が震えるほど心地いい。(これが、キス……なの？ か、身体が……頭……痺れて……なにも考えらんないっ！)

自分も同じようなキスをファイルーズにしたけれど、それは娼婦たちの技の見よう見まね。魔女のキスは、気持ちよさが段違い。まるで舌そのものが欲情しているように、複雑に絡み合う。舌と唾液をたっぷり舐られ、やっと解放された時には、足腰から力が抜けてヘナヘナと地面にへたり込んでしまった。

「あうん、ふは……あん、ンッ！ ……………ふあああ……………」

「ふふつ、おいしい……。はあ……久しぶりの女の子は、やっぱりいいわあ」

うつとりとした笑みを浮かべ、魔女が唾液に濡れた唇をぺろりと拭う。赤い舌の艶めかしさに、ルルはゴクリと喉を鳴らした。その小さな動きを目ざとく見つけ、彼女が嬉しそうに目を細める。そこには、さっきの謝罪で見せた殊勝さなんて微塵もない。それどころか、湧き上がる欲情を我慢できないように、ルルの肩を掴んで地面に押し倒した。魔女の顔が覆い被さってくる。再びキスされるのかと思い、反射的に目を閉じる。

でも、彼女が狙っていたのは別の場所だった。

「きやあああ!？」

いきなりシャツが捲り上げられる。外気に晒された乳房が、怯えて震える。洞窟内とはいえ、屋外で服をはだけられるなんて思ってたルルは、驚きすぎて反応が遅れた。

恥ずかしさを感じるより早く、アーシャの唇が乳首を捉える。

「きやあうン!!」

「あは……可愛い声……。ちゅ、ちゅぷ……。ちゅる、ちゅるん」

「ひっ、ふああああ!　　そ、そこ舐め……。ちや、ダメえええ!!」

豆粒よりも小さな突起を、舌がコロコロと転がしまくる。たっぷりの唾液を纏わせて、じゅるじゅると吸い上げる。かと思うと、なだらかな乳房の麓にいったん降りて、唾液の跡を残しながら再びゆっくり登頂し、再び舌先でぷるんと弾く。

「ひ、あ、はあああうン!」

乳首の小さな振動が、身体の中で何百倍にも増幅されたかのようにルルの頭を掻き乱した。舌が乳輪に沿って円を描くと、螺旋状の淡い刺激が乳首の先端に集まってくる。彼女が舐っているのは乳首周辺のごく狭い範囲なのに、全身を駆け巡る快感に抵抗できない。

「あは。ルルちゃんの乳首、硬く勃ってきた……」

「そ、そんなこと言わないで……。ひっ、ああうン!」

自分でも硬く張っているのが分かる小粒突起に、アーシャがいきなり歯を立てた。それはほんの甘噛みでしかないのに、噛み切られると思い込んだルルの股間が反応した。

(あ……!!)

ちろりと、なにかが零れる感覚。もしかして、恐怖で漏らしてしまったんだろうか。いくらなんでも失禁は恥ずかしすぎる。焦り、悟られまいとして、大慌てで脚を閉じる。で

も不自然な動きは、かえって彼女の興味を引いてしまった。

「あらあ？ ルルちゃん、そっちが、どうかしたの？」

「な、なんでもない！ なんでもないから……きやあ!!」

彼女の手がズボンの中に入り込もうとした。もちろん脚に力を入れて抵抗する。するとアーシヤは、いきなり首筋に吸いついた。

「ふあ!? あ、やあああ!!」

そちらに気を取られて腿が緩む。その隙に、彼女の指が一気に下着を突破した。カッと顔に血が昇る。お漏らししたのを知られてしまう。きやあきやあと悲鳴を上げて、彼女の肩を押し返す。しかし、お姫様を押さえ込んだ昨夜のような力は微塵も發揮されず、本来の非力なまま、指が秘部へと到達するのを易々と許してしまった。

「あつ！ やつ……やあああん、触っちゃダメえ!!」

彼女の中指と薬指が、確かめるように亀裂を滑る。失禁を知った魔女の嘲りが怖くて、目を開けていられない。肩を竦めながら、キュッと握った両手で口元を隠す。

「あは……ルルちゃん、濡れ濡れえ。ねえ、どっちで感じちゃったの？ キス？ それともおっぱいかしら」

アーシヤが、からかうように囁きかける。けれど想像していたのと内容が違う。

「ぬ、濡れ……？」

「そうよ。ふふっ……ほら、すつごい。お尻の方までおツユが垂れちゃって……」

「ん、はあうっ！」

秘裂を端から端まで指がなぞる。その滑らかな動きを、敏感な恥粘膜でルルも感じる。さっきのはおしっこじゃなかったのかと、一度は胸を撫で下ろす。でもすぐに、そこが溢れんばかりの蜜を湛えていることを知り、別の羞恥が全身を走り抜ける。

「やめ……そんなとこ触らな……くうんっ」

「そんなとこって、どこ？　ここ？　それとも、ここかしら」

「そこも、そこ、も……全部、ああああうっ！」

ルルが懇願するほど、アーシヤの指は性器の奥深くに潜り込んだ。膣口付近の粘膜を撫で回し、速度も上げてゆく。下着越しにもグチュグチュと水音が聞こえそうなほど激しく掻き回されて、背中が何度も跳ね上がる。

「ふああ、んは……ああ、ああああうっ！」

「ああ……ルルちゃん、可愛い声え……」

蕩けるような魔女の溜め息は、同性であるはずのルルの身体を熱く煽った。とろとろと際限なく淫蜜が溢れ、性器を弄ぶ指を手助けしてしまう。

「や、こんなの……ダメなのに……でも、でも……くふうううっ」

「ほらほら、どこが気持ちいの？　言ってごらんさい」

「どこって……どこも、ああ、んあっ!!」

アーシヤはルルの顔の横に手を突いて、激しく陰唇を震わせた。その苛める悦びに歪ん

だ笑みに、頭の片隅で、ふと、自分は罠に嵌められたんじゃないだろうかという疑念が湧いた。そういえば女の子が好きとも言っていたし、自分を手に入れるため、優しい素振りでこうなるように巧妙に仕向けられたのではないかと。

（そんな価値、あたしにあるわけじゃない……）

こんな馬鹿な小娘、騙すだけの手間をかける必要があるとは思えない。だから、どちらでも構わなかった。どうせ、もうファイルーズには二度と会えないのだから。

（ファイ様……）

彼女のことを考えるだけで胸が張り裂けそうになる。寂しさを埋めようとして、ルルはアーシャの首に腕を回した。命の恩人を傷つけた自分なんて、魔女の慰み者になるのがお似合い。自暴自棄になつて、自らキスを求めて唇を寄せた。

「ルルちゃん……」

そんな気持ちを察してなのかどうか、それとも単なる欲情からか、アーシャは嬉しそうに目を細め、いきなり舌を挿し入れてきた。ルルも、ためらいながら舌を伸ばす。

「ふみゅ、ふ……む……あふ、ちゅば、ちゅるるる、じゅる……ん、みゅうっ！」

魔女に倣って懸命に動かしてみるけれど、一方的に翻弄されるだけ。しなやかな舌が口腔内を暴れ回り、唾液をとろとろ流し込まれる。

その間も、彼女は秘部を嚙るのを忘れなかった。上では唇と舌が激しく触れ合い、下半身では恥裂を掻き回され、快感の挟み撃ちに耐えられず、ルルは身体をくねらせる。もち

ろん、その程度で逃れられるほど魔女の^{てくだ}手管は甘くない。身体の中でなにかが高まる。追
い詰められるように呼吸が荒くなる。

「んは……っ、あう、んッ、んみゅ、んきゅっ……んくううっ！」

「んふっ、いい感じにほぐれてきたみたいね。それじゃ……そろそろ、女の子の一番感じ
るところ、苛めてあげる……」

アーシャが意地悪く口角を上げた。それさえ、快感と呼吸困難で朦朧とした眼には、不
気味なほど美しく映る。陶然と見つめていると、恥裂を掻き回して彼女の指が突然動きを
変えた。性器の亀裂の上端を、思いきり摘み上げる。

「いッ……やあああッ!？」

まるで雷に撃たれたような、痺れを通り越した激痛に、ルルは身体の奥から絞り出すよ
うな悲鳴を上げた。硬直した指でアーシャの腕にしがみつく。

「やめ……そこ痛………ひいいっ！」

「ほーら。ルルちゃんの真珠、捕まえちゃった」

涙目で仰け反るルルを見下ろして、アーシャが楽しそうにさえずる。

「ここ、すっごく気持ちいいのよ。ルルちゃんも、すぐに夢中になっちゃうんだから」

「ひぎっ、いッ……あう、んぐうっ！」

キリキリと淫核を抓られ、声も出せない。なにが一番感じるところだ、こんなに痛くし
て酷いと、彼女を恨む気持ちが再び頭をもたげかける。――なのに。



彼女の顔が、近づいてきた。強い陽射しが逆光になって、表情はよく見えない。それでも、甘い雰囲気にもルルの鼓動が急に高鳴る。彼女の体重で乳房が潰れ、ドキドキと大きな心音が伝わってくる。

「だから……ね。邪魔する人は、誰も来ないわ……」

内緒話のように、頬を擦りつけてくる姫。その意味を理解した瞬間、ルルの心臓が大きく跳ねた。彼女の肩を掴みかけた手が、緊張で強張って動かない。

「……………あつ、はっ……………ンふああ……………」

ただ頬を合わせているだけなのに、懸命に呼吸を整えないと、満足に空気を吸えない。ルルも、仔猫のように頬を擦りつける。そこから、唇と唇が近づくのに時間はかからなかった。密やかになった吐息が混じり合い、自然と、重なり合う。

「ん、あ……………ファイ様……………ふ、はあ……………」

「だめ、ルル……………離さないで……………」

ただでさえ乱れていた息が、唇を塞がれ苦しくなる。それでもファイルーズは、少しの息継ぎも許さない。ルルを抱き寄せて、唇と、そして胸をぴったり密着させてくる。

「あ、あ……………ファイ、様。それ、そこ……………おっぱいが……………ン、あ……………っ」

うわごとのような呟きで唇が微かに擦れ合うのさえ、頭の芯が痺れるほど気持ちいい。彼女の舌が上唇に触れて、背筋がぶるりと震える。ルルも、自然に舌を差し出していた。爪の先ほどの舌尖同士を、踊るように絡め合う。

「んふ……美味し……」

ルルの舌をつるんと舐め取って、ファイルーズが微笑む。うつとりと目を細める妖しい笑みにゾクゾクする。彼女の唾液も、不思議と甘い。もっと欲しくなつて、まるで飼いの慣らされた犬のように、舌を伸ばして激しく喘ぐ。彼女は満足げに微笑むと、舌先でルルの舌の表面をくすぐった。

「ふあ！ あふ……は、あ……ん、ふあ……ああんッ！」

口腔にとろとろと唾液を流し込まれ、甘美な悦びが背筋を走り抜ける。むず痒いほどの快感に身悶えすると、重なつていた乳首がくりんと擦れ合った。

「ふッ、きゅふう……んッ!!」

ビリビリと鮮烈な痺れが身体を走った。たまらず背中を仰け反らせると、さらに強く乳首が擦れて、我慢できないほど身体が引き攣る。くすぐたたくて耐えられないのに、意識とは逆にファイルーズを抱き寄せてしまう。彼女も同じ感覚なのか、唇を震わせ涙を浮かべながら、それでも円を描くような動きで乳房を押しつけてきた。

「ファイ様っ。そ、そんな……おっぱいくっつけたら……くうん、ふはあうんっ!!」

「あ、あ……！ これ凄……いッ。ここ、こんなに……こんなに……っ!!」

互いの肩を掴んで、硬く勃起した乳首を捏ね回した。伸ばした舌にファイルーズが吸いつく。引き抜かれるかと思うほど強烈に吸引され、一瞬、頭が真っ白になる。たまらずルルも、彼女の唇にむしゃぶりついた。噛みつくような勢いで激しくキスを貪る。自分より

長身の少女を無我夢中で掻き抱き、唾液を求めて舌を挿し入れる。

「ふぐっ……む、ン……ぶあ……。はあ、はあ……はあああ……むうんっ！」

口腔内を掻き回されたお姫様が、苦しげに深呼吸する。かと思うや再び攻撃に転じ、ルルの下唇を甘噛みしてきた。ふたりとも、ほんの三日前までキスの経験なんてなかったのに、まるで快感に身体を乗っ取られてしまったみたいだ。もうキスなんて可愛いものじゃない。大胆に唇を重ね、舌を絡め、唾液を啜り合う愛撫に全身が酔い痴れる。

（す、凄い……よお……！ ファイ様が、こんな……こんなこと……あああッ！）

アーシャの弾力のある唇とも違う、ふわふわの感触。女の子の唇と身体は、ルルを虜にしていた。どこを触っても柔らかくて気持ちいい。相手が姫であることも、同性であることも、そして性への怖れすら、もう頭から完全に飛んでいた。ただ無心で快感を求め、肌と肌を撫で合わせる。もちろん、快感は上半身だけに留まらない。下腹部で、性器も刺激を欲してウズウズと騒ぐ。

「ン、くっ……ンンッ」

熱い粘液が、内腿を流れ落ちた。自分で触ろうにも、震える両手はファイルーズにしがみつき離れてくれない。彼女の脚を腿で挟んで、擦り合わせるのが精一杯。その動きに気づいたファイルーズは、不意に唇を離し、目を細めながらルルを見下ろした。

「はあ……はあ……。ン、ふ……ふふ、ふふふっ……」

おっとり姫の、快感に蕩けた瞳に惹きつけられる。彼女がルルの身体の上を、下の方に

移動する。触ってもらえるという期待に胸が高鳴る。なのに。

「……はっ!? あああう!」

思っていたのとは違う場所に痺れが走った。胸の先端が温かい。下半身までは降りていかなかった唇が、ルルの乳首を口に含んでいる。

「ここが……いいのでしょうか? ん……ちゅ、ちゅば……ちゅるるッ!」

「はっ……あふっ……んっ。そ、そこじゃなくて……そこ……そこ、ああッん!」

股間の疼きを構ってもらえず不満なはずなのに、ルルは歓喜の声を上げさせられた。アーシャのように嘔んだりはしない。けれども、乳房を麓から揉み上げ、ちゅばちゅば音を立てられると、まるで母乳が噴き出すように、快感が彼女の口に吸い込まれていく。

「ンあンあ、あッ、おっぱい……気持ち……いい、あああうっ」

悶えるルルに触発されたように、ファイルーズの愛撫が激しくなった。額に汗を浮かべながら、左右の乳蕾を懸命に舌で転がす。

「ファイ様、すごい……! ど……どこで、こんな……」

胸だけでルルを追い詰める巧みな愛撫は、数日前まで処女だったお姫様とは思えない。

「あら、ルルが教えてくれたのよ? ここ、こうすると気持ちいいって……。ちゅ、ちゅば、ちゅるるっ」

「ンッ、きゅふ……ン、あんっ、あああんっ!」

悶えながら、ルルは複雑な気持ちになった。あの夜の行為は、思い出すたび後悔で胸が

苦しくなる。けれど彼女は、そんな自分の拙い愛撫を気持ちよかったと言ってくれた。罪悪感と嬉しさと。感情の天秤が、愛撫による快感で不安定にぶれまくる。

「あ、あああんつ。ファイ様……ファイ様ああつ！」

計りかねて、ルルは快感に逃げた。ファイルーズの頭を抱き締めて、膨らみの控え目な胸に押しつける。しかし胸が気持ちよくなるほど、放置された恥裂は切なくなるばかり。欲求は行き場を失くし、股間をお姫様の太腿に擦りつける。

娼館で何度も見た、うねるような女性の腰つき。あんなに卑猥だと思っていた動きを、今まさに自分がしている。性欲を抑えきれず、愛撫を切望している。自分の浅ましい姿が恥ずかしくなつて、なのに、腰を止められない。

「ファイ様……お、お願いします……。胸……だけじゃなくて……」

我慢しきれず、ついに口に出しておねだりした。しかしその途端、愛撫にのめり込んでいた彼女の顔に戸惑いが浮かぶ。目を泳がせながら、見当違いのことを聞いてくる。

「……おっぱい、気持ちよくない？」

「き、気持ちいいです！ いいですけど……でも……」

そういうことじゃない。だから流れる蜜に気づいて欲しいと、淫裂をファイルーズの太腿に擦りつける。その脚がビクンと震える。姫の垂れた眼が、戸惑いに揺れる。

その反応で分かった。彼女は、ルルの要求に気づいている。指を蠢かせ、腕を下半身に向けながら、それでも触ろうとしてこない。焦れたルルは思いきって彼女の手を掴み、そ

こへ誘導しようとしたら、驚いたように振り払われた。

「ファイ様、なにを怖がって……」

「だ……………だって……………」

あの天真爛漫なファイルーズが、怖れている。快感呆けた頭で考え、そして、やっと気がついた。ルルの方こそ、彼女の気持ちを分かっていたいなかったことを。

（そうか。ファイ様は、経験ないんだ……）

いくら同性とはいえ、他人の性器に初めて触れるのを怖がって当然。デリケートな肉の壁を、どう扱えばいいのか分かるはずがない。あの夜のルルは操られていたし、オナニーの経験もあったし、それに娼館で見聞きして、処女とはいえ、それなりの知識もあった。お姫様とは、思ったよりも性に関して差があつたんだと、初めて理解する。

（それに……………さつきから、あたしばっかり気持ちよくなってる）

本当は、ファイルーズを気持ちよくしてあげなくてはいけなのに。反省したルルは、唇を噛んで股間の疼きに必死に耐えながら、身体を起こした。目を逸らしていたファイルーズは不意打ちを受け、簡単にふたりの上下が入れ替わる。

「え……………きゃあ!？」

驚いて起き上がるようにする彼女に全体重をかける。といつても、武術の心得もあるお姫様を押さえきれものじゃない。義務感に逸るルルは素早く身体を半回転させ、彼女の股間に顔を突っ込んだ。

「ふああああ!!」

咄嗟に伸ばした舌が、いきなり陰核を捉えた。甲高い悲鳴と共に、ファイルーズの身体が激しく仰け反る。ルルは跳ね飛ばされないように腿に手をかけ、強引に開脚を強いた。内腿が緊張するのを掌で感じる。それをなだめるように、鼠径部に優しくキスする。

「ひっ、ひはっ！ なにこれ？ そんなとこ……痺れて、ひいいッ!!」

淫核よりは刺激が弱いだろうと思ってそこを選んだのに、火照りきっていた身体には逆効果だったみたいだ。落ち着くどころか、彼女の脚はピンと真っ直ぐに強張った。膝をバタバタ暴れさせて唇から逃れようとする。あまりに激しい反応に、ルルも一瞬戸惑った。

（でも、ここでもいっぱい感じるってことだよな……）

なら、それが分かった以上、遠慮する必要はない。

「ルル、なにを……きやああああ！ だ、だめ！ そんなの……やああああん！」

泣き出しそうな悲鳴もお構いなし。むしろ、羞恥に染まった声をもっと聞きたくて、ルルは脚の付け根の浅い窪みに舌を這わせた。細かく震わせながら往復させると、彼女のお尻が小さく強張る。

「ンッ……あうっ！ ルルだめっ！ か、感じすぎて……ひッ、い……ッ！」

キスから逃れようとしてか、ファイルーズの腰が大きく跳ねた。しかし彼女の意図とは反対に、さらにルルの頭を股間の奥へと迎え入れてしまう。

「——!!」

眼前に迫る光景に、ルルは思わず息を飲んだ。月光の下とは全然違う、昼の陽光で見るとお姫様の秘密の場所に。ファイルーズの性器に。恥毛は肌の色と溶け合って、ほとんど目立たない。でも陰唇は淫蜜に濡れて、テラテラと輝いている。

卑猥で、そのくせ可憐なたたずまい。綻んだ肉襞を指で開くと、ピンクの粘膜が現れる。その中心の、慎ましい小さな穴を見た時、ルルは胸の痛みを思い出した。

(あたし、ここを……)

散らしてしまった。国の宝のお姫様の、純潔を。血が流れていた。痛かっただろうか。今でも痛いのだろうか。シクシクと切なく胸が締めつけられ、気づけば、自然にそこに口づけていた。破瓜の痛みを少しでも和らげようと、舌全体を使って癒すように。

「ふ……あ、ふあつ……。はああん、あん、やつ、はあああん！」

膣口の縁で舌先を弾くようにして粘膜を掻き回す。愛撫を小休止している間にせっかく整えていた彼女の呼吸が、瞬く間に乱れ始めた。

(やだ。ファイ様の喘ぎ声、可愛い……)

愛らしい嬌声に逆上^{のぼ}せたルルは、ここが砂漠の真ん中だということを忘れて淫裂舐めへのめり込んだ。舌を濡らす蜜の、掬いきれないほどの量と、唇との間で糸を引く濃厚さが嬉しくなつて、堪らなくて、思わず下品な音で啜ってしまう。

「ちゆる、ちゆるる、じゅばじゅば、ずるるっ！」

「やだ、変な音立てないで！ や、恥ずかし……ひ、ひや、あうん、やあああ……！」

ファイルーズの恥じらいの声が、空に吸い込まれていく。それに負けない卑猥な粘着音が、辺りに響き渡る。

「ファイ様、気持ちいいですか……？　ちゅば、じゅる、じゅるじゅる、じゅるうつ！」

「わかんない！　わかんないっ！　や、そこ、そんなに……だめ、ダメ、いいいい！」

言っていることが支離滅裂。でも彼女の身体はガクガク震え、太腿がルルの頭を挟み込む。感じていると確信し、さらに激しい愛撫を加えた。陰唇の襞の間に舌を挿し込み震わせる。膣口周辺を舌先でくすぐりまくる。そのたびに彼女は腰を大きく跳ね上げ、濃厚な淫蜜が涎のようにお尻まで溢れ出す。

「ファイ様、もっと気持ちよくなつて……ん、ちゅ、じゅる、ちゅば、じゅるる！」

「だめだめ、だめえええ！　わたし……も、わたしもお！」

「——え？」

このまま絶頂させてしまおう。そう思った時、ファイルーズがお尻をぐいっと引き寄せた。なにをするのかと考える間もなく、恥裂に温かいものが押しあてられる。

「ふあ!?　ファイ様なにを……あ、あ……はああう！」

ずるりと恥襞を擦られて、全身が総毛立った。ルルの性器が舐められている。快感が愛撫への躊躇を振り払ったのか、それとも真似ればいいと気づいたのか、なんの迷いもない動きで、ファイルーズが膣前庭を掻き回してくる。

「ファイ様！　お……お姫様が、そんなとこ舐め……舐めては、舐め、ふえええっ！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！



二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！



二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！



リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラソベ！



あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!